

サトリの
ココロ

未曾有の被害を残した東日本大震災から1か月半。
今回は1995年阪神・淡路大震災の被災と復興を
身近に経験された僧侶にうかがう特別編です。

日蓮宗行守寺住職 清水教信さん

第13回

1995年1月17日、午前5時46分。まだ夜が明ける前、ドーンという轟音とともに、寝ていた体が浮き上がりました。立って歩くこともできないほどの大きな揺れ……「これは尋常なことではない」と、寝ている子どもたちをたき起こし、タンスの下敷きになつていたおばあちゃんを助け出し、なんとか外に出ました。これが、阪神・淡路大震災でした。

この度の東日本大震災には、阪神・淡路大震災を経験した私でも、より凄惨さを感じずにはいられません。最愛の人を亡くした方々の心中は察するに余りあります。津波によつて街が丸ごとなくなつてしまうような甚大な被害、母親を探して歩く小学生の姿……テレビ映像を見ては涙が止まりませんでした。福島第一原発で決死の作業を行つている方にも頭が下がります。そもそも、原発は私たち国民みんなの責任です。楽で便利な生活を望んだ結果なのです。

震災を通して、自らを見つめ直すことが大事

生きている人間が前向きに
がんばるしかありません

しみず・きょうしん 昭和26年、長崎県生まれ。高校までを長崎で過ごし、立正大学文学部地理学科に進学。大学在学中から池上本門寺にて修行。卒業後は編集などの仕事を経て、行守寺3代目住職となる。日蓮宗兵庫東部宗務所長、日蓮宗近畿教区長。1995年1月17日の阪神・淡路大震災では、神戸市兵庫区にある行守寺も本堂などが半壊となる被害を受ける。

わが家は自宅も本堂も半壊。私たち家族はそれから約1年3か月、車庫を仮住居として暮らしました。ただ幸いにして身内に不幸はありませんでした。家族みんなが生き残っている。「生きてさえいれば何とかなるやろ！」そんな思いで、落ち込まずに進むことができました。

また一方で、「自分に何かできることはないか」と思っている人も多いでしょう。「がんばれ」と言うことはできますが、被災された方にとつては「これ以上、どうがんばんねん」という心情でしょう。そんなとき、支える側は話を聞いてあげるだけで良いのです。人は話を聞いてもらうことで安心します。そばに寄り添い、話を聞いて安心感を与えてあげましょう。

そして、家庭の奥さん・お母さんは常に明るくいることです。お母さんの笑顔があれば、子どもも安心します。お母さんの明るさは家族みんなのパワーにもなります。大震災は被災地東北だけのことでありませぬ。私たち日本人みんな受け止め、みんな前向きに生きていくことが大切です。

被災された方には「日にち薬」(辛く悲しい出来事も時間とともに癒され、それを乗り越えることができる)しかないのかもしれない。

被災者に寄り添い 安心を与えてあげましょう



神戸で被災した、法蓮寺の内藤経雄住職(右から2人目)と招慶院の内田泰善住職(右から3人目)にも話をうかがった。